横須賀市立中央図書館 郷土資料室

緒明山 OAKIYAMA-TSUSHIN 通信19

軍艦大鯨進水記念絵はがき
（横須賀市立中央図書館所蔵）

発行日
令和８年（2026 年）５月 26 日

発行者
横須賀市立中央図書館郷土資料室
住所　神奈川県横須賀市上町 1-61
電話　046-822-2077

本誌は印刷発行していません．右の二次元コードか下の URL で横須賀市立図書館ホームページ内「デジタルアーカイブ」にアクセスして閲覧してください．ダウンロードもできます．
https://www.yokosuka-lib.jp/contents/archive/

《 研究ノート 》

ドゥーリットル空襲と横須賀海軍工廠

―「善行」に対する表彰をてがかりに―

郷土資料室　橋本和磨

令和７年度、市内在住の方から寄贈していただいた資料を紹介します。

1. はじめに

蒼みがかった灰色の額縁に、決して色褪せることのない「時代の証言」が残されていた。寄贈者の話によると、被表彰者とのつながりはないため、詳しい経緯は不明であるが、額装されたまま、静かに自宅に保管されてきたという。計測したところ、表彰状は縦 38.9cm×横 52.3cm と、現在の Ｂ３サイズ（36.4cm×51.5cm）に近しい大きさである。今日の私たちから見れば、Ｂ３サイズは、バスや電車をはじめとする公共交通における中吊り広告として馴染み深い。表彰状の額縁外寸は縦 42.2cm×横約 55.9～56.2cm であり、面材は厚さ約３mm のガラス、裏板はベニヤ板で構成される。また、吊り金具を備えるなど、壁面掲示を前提としている。こうした寸法と仕様から、表彰状が一定期間、人目に触れる場所に掲出されていた可能性が示唆される。

本稿では資料を紹介するとともに、二人の「善行」に対して認められた表彰状をてがかりとして、ドゥーリットル空襲[1]における、横須賀海軍工廠への被害実態についての理解を深めたい。

2. 「表彰状」の翻刻

はじめに、「表彰状」翻刻文[2]を掲載する。

表 彰 状

職　手[3]　　瀬 尾 彦 一
二等木工員[4]　　川 島 寛 一

右者昭和十七年四月十八日午後零時五十分頃、工廠内工事々務所ニ在リテ勤務中、偶々空襲警報発令セラルヽヤ工事中ノ建物警戒ノ為、同廠第八建物附近通行中、来襲セル敵機ガ該建物ニ対シ、焼夷弾四個（推定）ノ投下シタルヲ目撃、時ヲ移サズ工廠従業員ト協力之ヲ消火セシメタルモ、更ニ現場ヨリ約百米ヲ隔テタル第六建物（最近竣工セル造機部外業工場製罐場及仕上場）屋上ヨリ発火シツヽアルヲ発見、直ニ現場ニ馳付ケタリ、是ヨリ先現場ニ於テハ、

---

[1] 先行研究によっては、これを「ドーリットル空襲」と記述する事例もみられる。事実、防衛省防衛研究所では「昭和 100 年」特設 Web ページ内において、これを「ドーリットル空襲」と表記している。（最終閲覧日 2026 年５月 20 日）本稿では、『新横須賀市史』別編 軍事（横須賀市、2012 年）に従い、引用時を除いて「ドゥーリットル空襲」と表記する。

[2] 必要に応じて新字体に改め、適宜読点を付した。

[3] 昭和 12 年５月に「海軍工員規則」が定められる。同規則では、第十四条により通常工員・臨時工員・見習工員が規定される。また、第十六条で「通常工員及臨時工員ノ級別」を工長・工手・職手・一等工員・二等工員に定める。表彰状が横須賀海軍建築部長から出されたことを鑑みるに、被表彰者二名は、建築部管轄下で工事作業に従事していたものと考えられ、第六建物という呼称についても建築部の理解を反映しているものと推定できる。尚、「当時工事中」とされる第八建物については、第六建物から「約百米」と記されるが、今回確固とした比定作業ができなかった。

[4] 前掲の「海軍工員規則」第十五条によれば、「工員ノ職種名ヲ附表第一ノ如ク定ム」とあり、附表を参照すると「木工員」の職種名が確認できる。

同工廠消防隊ガ唧筒[5]ヲ操作シ、消火ニ努メ居リタルモ、同所屋上ハ約二十数米ノ高所ナル為、水勢十分ニ達シ得ズ、且ツ屋上ニ登ル手段モナク一同焦燥ノ状態ナルヲ見ルヤ、突嗟ニ屋根ノ鉄板ヲ取ラバ容易ニ上部ヨリ注水シ得ルコトニ気付キ、時ヲ移サズ隣接建物ノ窓ヨリ発火中ノ建物屋上ニ登攀シ、予テ携行セル金梃子[6]ヲ以テ発火附近ノ屋根ヲ剥ギ取リ、以テ「ホーズ[7]」ヲ火災箇所ニ導クコトニ成功シ遂ニ之ヲ鎮火セシムルニ至ラシメタリ

因ニ同建物ノ母屋及裏板木造及「アスファルトフエルト」ニシテ両名ニ於テ前記ノ如キ勇敢且ツ機宜ノ処置ナカリセバ相当大ナル被害アリシモノナラムト思料セラレタリ

右ノ行為ハ工事主任官ノ報告並本人ノ口述ニ依リ明ラカニシテ、戦時下各員空襲時生起スルコトアルベキ突発事故ニ対シ周到ナル注意ニ付、埶[8]レモ万全ヲ期シツヽアルトコロナルモ、今次ノ如ク白昼突発的ノ空襲下ニ於テ、然モ消防隊員何レモ焦燥中ノ際ニ当リ、克ク神速果断敢然身ヲ挺シテ適切ナル処置ヲ採ルニ至リタルハ、畢竟両名ガ平素能ク上司ノ指示ヲ恪遵躬行[9]セル賜ニシテ、其ノ犠牲的行為ハ真ニ海軍軍属精神ノ発露トシテ衆人ノ模範トスルニ足ルモノト認ム

仍テ茲ニ其ノ善行ヲ表彰ス

昭和十七年四月二十九日

横須賀海軍建築部長正五位勲三等　鈴木只重〔印〕

写真１〔印〕
「横須賀海軍建築部長印」
（2.5cm×2.5cm）

表彰状

横須賀海軍建築部長正五位勲三等　鈴木只重

写真２　寄贈時の表彰状（額装）

3. ドゥーリットル空襲について

表彰状にある「昭和十七年四月十八日」に行われた空襲とは、今日では初の本土空襲として知られるドゥーリットル空襲を指す。昭和 16 年（1941 年）12 月 8 日の真珠湾攻撃から 4 か月余を経た昭和 17 年（1942 年）4 月 18 日、米軍は航空母艦ホーネットから B-25 爆撃機を発艦させ、太平洋上から飛来した 16 機が日本本土各地（横須賀を含む東京、川崎、名古屋、神戸など）を攻撃した。名称は当時爆撃機隊指揮官であった James Harold "Jimmy" Doolittle の名に由来する。本空襲を契機として防空体制の一層の強化が推し進められたことが、従来から指摘されてきた。具体例を挙げると、防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 本土防空作戦』（朝雲新聞社、1968 年）では、「陸軍の防空施策並に防空作戦の状況」を中心に叙述し、空襲の記述に続けて「空襲後の防空組織強化」と題する章を設けている[10]。その後国内では、柴田武彦・原勝洋『日米全調査 ドーリットル空襲秘録』（アリアドネ企画、2003 年）により、日米双方の資料を突き合わせ、実態と被害

[5] ポンプのこと。

[6] かなてこ、バールのこと。

[7] ここでは消火用のホースを指していると考えられる。

[8]「孰〔いずれ〕」の誤記と考えられる。

[9]「恪遵躬行〔かくじゅんきゅうこう〕」は一般に「つつしんで従い、自ら実践する」意とされる。ただし、当時の用例に即した解釈を行うためには、同時代史料との比較検討が必要であり、現時点では当該表彰状における厳密な意味の断定は控えたい。この点は、海軍内のみならず総力戦体制下における国策標語の研究動向も踏まえた理解が必要となろう。今後の課題としたい。

[10] 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 本土防空作戦』（朝雲新聞社、1968 年）121 頁等を参照。他にも『戦史叢書 本土方面海軍作戦』（朝雲新聞社、1969 年）では、主に海軍の視点から記述がなされた。本稿では『日米全調査 ドーリットル空襲秘録』刊行以前、本空襲について論じた一例として取り上げた。また、当日の東京空襲については鈴木芳行『首都防空網と〈空都〉多摩』（吉川弘文館、2012 年）土田宏成『帝都防衛 戦争・災害・テロ』（吉川弘文館、2017 年）においても言及がある。（いずれも横須賀市立中央図書館開架図書）尚、『戦史叢書』については、原剛「『戦史叢書』の来歴および概要」『防衛研究所戦史部年報 創刊号』（防衛研究所戦史部、2001 年）及び、最近刊行の長谷川優也『戦史を編んだ人々』（帝京大学出版会、2026 年）も参照されたい。

の全体像が示された[11]。同書によれば、横須賀を目標にしたのは「十三番機」であり、房総半島南部を横断して東京湾側へ進入し、観音崎上空を経て、午後1時40分頃に横須賀地区を爆撃したとされる[12]。さらに、『新横須賀市史』は、前書の成果を踏まえつつ、当日の横須賀への空襲をより詳細に描き出した。とりわけ横須賀鎮守府では、開戦直後の昭和16年（1941年）12月11日、横須賀航空隊と館山航空隊（千葉県）の担当海面を定めて敵機来襲に備え、「横須賀鎮守府航空戦要領[13]」「敵艦船攻撃二法[14]」等を相次いで整備するなど、防空体制の構築が進められていたものの、結果として本空襲の阻止には至らなかった。同書では、その後防空体制の見直しを迫られていく過程が具体的に示される[15]。加えて、『新横須賀市史』での調査成果は高村聰史『〈軍港都市〉横須賀：軍隊と共生する街』（吉川弘文館、2021年）』にも継承される。同書では、ドゥーリットル空襲は「いきなりの空襲」として取り上げられ、軍港都市の市民生活に与えた衝撃の一端が論じられている。

一方で、この日の空襲被害は、これまでどのように語られてきたのだろうか。以下に、主な言及をいくつか取り上げる。例えば、石井昭氏は『ふるさと横須賀』において「大鯨に魔の一発」と題して紹介している[16]。『横須賀海軍工廠外史〈改訂版〉』〔以後『外史』）では、元海軍技術大尉であった斎藤醇二氏による回想が挿入され、当時第四船渠にて航空母艦へと改装中であった潜水母艦大鯨[17]の被弾に言及している[18]。さらに、『市史研究横須賀』第15号では、戦後70年にあわせて特集が組まれた。見習職工教習所を経て、横須賀海軍工廠造機部へ入廠した鈴木正年氏が「大鯨のところに爆弾が一発落とされた」と当日の様子を語り始め[19]、逸見国民学校で教職を勤めた鈴木千代子氏は、遠足の帰途に飛来する航空機を目撃し、高射砲の射程が届いていないように見えた状況を目の当たりにしたという[20]。

4. 表彰状が記す空襲対応

先に述べたドゥーリットル空襲を皮切りに、横須賀をはじめ、三浦半島地域における空襲・機銃掃射の被害については、既出の調査研究の他にも実態の解明に迫ろうとする動きが続いている[21]。こうした状況の中で、被害の実態を裏づける記録が横須賀で新たに発見された意義は極めて大きい。加えて本資料は、表彰が行われた事実を示すにとどまらず、表彰

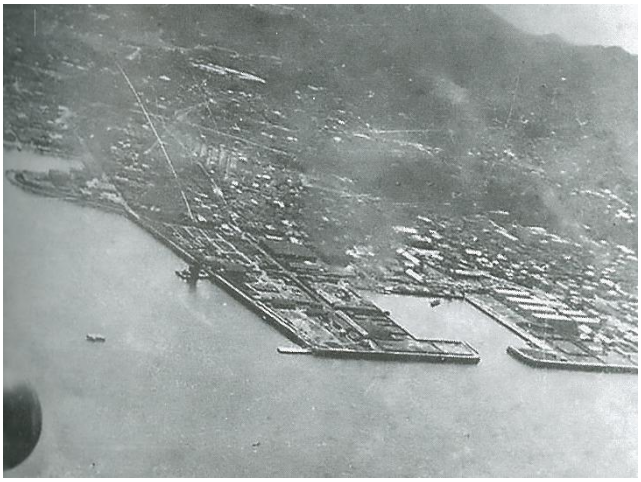


写真３　空襲直前、十三番機から撮影された安浦地区
『新横須賀市史』別編 軍事（横須賀市、2012年）
672頁より転載（米国議会図書館所蔵）
※13番機から撮影された横須賀上空の写真として知られる２枚のうち１枚

[11] 刊行時点での史料状況については同書２頁を参照されたい。尚、執筆当時柴田氏は防衛庁防衛研究所戦史部主任研究官。また、原氏は戦艦大和の研究でも知られる。ちなみに横須賀市立中央図書館では原勝洋監修『海軍暗号書Ｄ壱（発信用）』（ゆまに書房、2007年）を開架で手に取ることができる。（2026年5月20日現在）

[12] 柴田武彦・原勝洋『日米全調査 ドーリットル空襲秘録』（アリアドネ企画、2003年）107頁

[13]『新横須賀市史』資料編 近現代Ⅲ（横須賀市、2011年）689頁

[14] 前同698頁

[15]『新横須賀市史』通史編 近現代（横須賀市、2014年）631頁～637頁

[16] 石井昭『ふるさと横須賀』下（神奈川新聞社、1987年）256頁

[17] 大鯨について、進水記念絵葉書を主たる対象として本号拙稿「軍艦大鯨進水記念絵葉書―横須賀市立中央図書館所蔵資料から―」にまとめた。また、本稿１頁冒頭にも別図案の絵葉書を掲載する。

[18] 元海軍技術大尉 斎藤醇二「造機部外業戦時中の回想」『横須賀海軍工廠外史〈改訂版〉』（横須賀海軍工廠会、1991年）393頁～395頁

[19]「《市民が語る横須賀ストーリー》海軍工廠と職工生活―鈴木正年さんに聞く―」『市史研究横須賀』第15号（2016年）90頁

[20]「《市民が語る横須賀ストーリー》教員生活と山中町空襲―鈴木千代子さんに聞く―」前同61頁

[21] 直近では、前号となる『緒明山通信』第18号で、高橋冨美氏による貴重な証言を得られた。「横須賀には空襲はなかったという都市伝説みたいな話があるようだけど、そんなことはないことをわかってもらえたらと思います」と紙上に記される。前号も併せてご覧いただきたい。

に至る経緯を具体的に伝えている。したがって、空襲から 80 年以上を経た今日においても、海軍工廠施設が空襲を受けた際に、いかなる対応が取られたのかを実態として解明するための重要な手がかりとなる。以上を踏まえつつ、表彰状の記載内容から読み取れる一連の経緯を以下に整理する。

---

① 昭和 17 年 4 月 18 日 12 時 50 分頃、工廠内工事事務所で勤務中、空襲警報が発令される。
② 工事中建物の警戒のため第八建物付近を通行中、敵機が第八建物に焼夷弾 4 個（推定）を投下するのを目撃。
③ 工廠従業員と協力し、第八建物の火災を消火する。
④ 現場から約 100m離れた第六建物屋上の発火を発見し、現場に駆け付ける。
⑤ 消防隊が消火に努めるが、屋上が約 20 数 m の高所で水勢が届かず、屋上に登る手段もない状況である。
⑥ ２名は屋根の鉄板を剥がして上から注水できると気付き、隣接建物の窓から屋上へ登る。
⑦ 携行していた金梃子で発火付近の屋根を剥ぎ、「ホーズ」を火災箇所へ導入し、鎮火に至らせる。
—11 日後—
⑧ 昭和 17 年 4 月 29 日付で表彰状が作成される

---

5. 通信記録にみる空襲被害と情報共有

ここまで、表彰状が記す空襲対応を中心にみてきたが、当時の他記録を参照すると、表彰状の記述と対応する事実関係がより明確となる。被害の翌日に発信された記録を含む「横須賀鎮守府戦時日誌」（防衛省防衛研究所蔵）をみると、「工廠造機部機械工場附近ニ焼夷弾及爆弾落下セシモ直ニ消火ス[22]」と記されており、表彰状に書かれた記述と概ね一致する。この他鎮守府及び海軍工廠に関しては、「楠ケ山（鎮守府裏）」への空襲や既出の「大鯨」の被害についても記される。本記録は「横鎮機密第三九五番電 横鎮戦闘概報第三 四月十八日」として 4 月 19 日午前 1 時 25 分に横須賀鎮守府長官から軍令部総長・海軍大臣へ発信された通信内容の一部であり、この他、連合艦隊長官をはじめとする各艦隊長官、ならびに呉鎮守府長官へも死傷者の数も含めて機密事項として通報された。ここには横浜・名古屋・四日市方面の被害についても同時に記されるが、鎮守府所在地である横須賀方面の報告が特に詳細である。少なくとも、横須賀海軍工廠造機部の建物への被害に関する情報は、横須賀海軍工廠にとどまらず、横須賀鎮守府内で早期から把握され、上級機関・関係各所に共有されていたとみてよい。

6. 新聞に見る空襲被害の発表

しかしながら、「軍港市民」をはじめとする、鎮守府外部の人々は、空襲翌日に発売された鎮守府発表を掲載する新聞紙上において、被害の実態を正確に把握することは困難であった。「本県官民の機関紙」と紙上に謳われる昭和 17 年 4 月 19 日付『神奈川新聞[23]』第一面は、昨日の敵機来襲についての記事が多く並ぶ。なかでも「海軍施設に被害無し 敵機横須賀軍港を盲撃」との小見出しのもと、「（十八日横鎮発表）四月十八日午後一時過ぎ暗褐色塗の敵機一機横須賀上空に現はれ、爆弾数個を投下せるも全部楠ケ山山中に落下し、海軍施設並に人員に被害なし」と横鎮〔横須賀鎮守府〕の発表を報じている。以上のことを踏まえると、早期に被害を把握していた横須賀鎮守府は、爆弾投下の事実自体は認めつつも、落下地点を「楠ケ山山中」に限定し、海軍施設および人員に被害はないとの説明を当日中に外部へと発表し、それが翌日には新聞紙上に掲載されていたことになる。

7. 表彰事実の共有範囲についての考察

再び横須賀鎮守府内部へと目を向けたい。「横須賀鎮守府公報」（防衛省防衛研究所蔵）には、人事異動等の報告とあわせて表彰に関する記事も見られる。概観するに、当該表彰状と同様、表彰行為の具体的内容を比較的詳しく記した掲載が確認され

---

[22]「横須賀鎮守府戦時日誌」（防衛省防衛研究所蔵）尚、本稿では国立公文書館アジア歴史資料センター Ref.C08030316800 を通じて閲覧・参照した。

[23]『新横須賀市史』資料編 近現代Ⅲ（横須賀市、2011 年）698 頁にも一部掲載。

る。ただし管見の限り、残存する昭和 17 年分の公報には、当該表彰に関する掲載は確認できていない。また、今回の調査過程において、当室所蔵資料の中から、横須賀海軍建築部「部報第一一号（部内限）」（昭和 18 年 5 月 6 日）の現物が新たに見いだされた。紙幅の都合上、詳細は割愛するが、「部内限」とされた同部報には、本稿で扱う表彰状の約 1 年後に当たる昭和 18 年 4 月 29 日付で、横須賀海軍建築部長であった住木直二（海軍技術少将）から片山泰雄（海軍技手）に対して行われた表彰の記事が掲載されている。そこには本稿で取り上げた表彰状と文言上の類似点が複数認められ、表彰理由の叙述や評価の枠組みが組織内で共有され、一定の書式にもとづいて運用されていたことがうかがえる。尚、本稿で取り上げた表彰についても同種の部報に掲載されていた可能性が高いが、今回の調査では確認に至っていない。以上のような制約はあるものの、少なくとも昭和 17 年中、横須賀鎮守府所管下では、建築部を除けば、当該表彰の事実を把握し得た者は当時ごく限られていたものと考えられる。

8. 第六建物について

今回新たな発見もあった。先に掲載の通り、表彰状には「第六建物（最近竣工セル造機部外業工場製罐場及仕上場）」とあるが、昭和 17 年 3 月に竣工した造機部の建物として「造機部外業工場製罐場及仕上場」の存在が確認されており、これが「第六建物」を指しているものと考えられる。造機部内では、鍛錬・鋳造・製缶・銅工・機械・組立を内業[24]とし、これに対して造機所掌の完成品を艦内に取り付け運転完了までの工事一切を施行することを外業の担当としていた[25]。2006 年に横須賀市教育委員会が発行した報告書[26]によると、現在、ヴェルニー公園から 4 号ドック（第四船渠）を見た際に、奥の区画に位置していた米海軍横須賀基地 A39 建物（2003 年 11 月 26 日～2004 年 5 月 31 日にかけて解体）について、『外史』掲載の昭和 20 年時点の造機部の配置図[27]を元に「外業工場」であったことを指摘し、同書はさらに『横須賀海軍工廠史』第八巻[28]（横須賀海軍工廠会、1998 年）を元に昭和 17 年 3 月に竣工の「造機部外業工場製罐場及仕上場」であったとする[29]。以上を踏まえれば、実際に火災が発生した「造機部外業工場製罐場及仕上場」は、米海軍横須賀基地の一部として近年まで使われていた[30]。

9. 表彰状はどのように「善行」を表彰するのか

最も注目できるのは、表彰状が「工事主任官ノ報告並本人ノ口述」に基づいてどのように「善行」を表彰しているのかであろう。考察にあたり、表彰をめぐって、当時いかなる規則が存在していたのか概観しておきたい。昭和 12 年 5 月 1 日達第六十四号によって「海軍工員規則」の制定が通達された[31]。本規則第八章には「表彰及賞与」について記される。内容をまとめると、表彰主体を海軍工作庁長としつつ「所属長官ノ認可」を要することを明記し、表彰が上位の承認過程を伴うことを制度上要請する。また「庁ノ内外ヲ問ハズ特ニ衆人ノ模範ト成ルベキ善行」に該当する表彰について、委員会を設けて審査させる旨を規定し、表彰が審査手続を経るべき対象として組織的に取り扱われたことを示す。さらに、表彰に際して名誉章および賞状を付与すること、名誉章の種類・等級・付与区分が附表により定められ

[24]『外史』389 頁

[25]『新横須賀市史』別編 軍事（横須賀市、2012 年）338 頁

[26]『横須賀市文化財調査報告書第 43 集 旧横須賀海軍工廠造機部製罐工場ほか建物及び同クレーン調査報告書 ―米海軍横須賀基地 A33・A36・A39 建物―』（横須賀市教育委員会、2006 年）

[27]『外史』373 頁

[28]『横須賀海軍工廠史』第八巻（横須賀海軍工廠会、1998 年）525 頁

[29]『横須賀市文化財調査報告書第 43 集 旧横須賀海軍工廠造機部製罐工場ほか建物及び同クレーン調査報告書 ―米海軍横須賀基地 A33・A36・A39 建物―』（横須賀市教育委員会、2006 年）8 頁～9 頁・37 頁～38 頁

[30] 尚、『外史』では、取得日付は昭和 17 年 3 月 25 日、「鉄骨木造平屋建中二階付」の新築とされていることを付記する。このことは表彰状が記している「最近竣工」と一致する。また、戦時中の建替改修等の情報が、その後刊行の『横須賀海軍工廠史』第八巻（横須賀海軍工廠会、1998 年）を含め管見の限り見当たらない。尤も惜しむらくは当該建物が令和に現存しないことである。

[31] 簿冊「昭和 12 年 達 完」（防衛省防衛研究所蔵）に所収される。本史料には「海軍諸例則へ登載」との印が認められる。同規則は、財団法人史料調査会海軍文庫所蔵（出版当時）の「昭和 10 年第 14 版を昭和 16 年に改訂した最終版」を原書房が復刻した海軍大臣官房『海軍諸例則』巻三(2) 249 頁によっても確認できる。（横須賀市立中央図書館開架図書）

ることを規定し、附図により、名誉章・賞状の制式を定めている。尚、海軍全体では昭和 13 年 9 月 5 日付「戦時事変中ニ於ケル軍人軍属表彰取扱ニ関スル件[32]」において、「勇敢奇特ニシテ衆人ノ模範ト成スベキ行為アル者」に対し、「艦船職員服務規程」および「海軍下士官兵善行章令」の規定を適用することは差し支えないとされていた。併せて、「適宜ノ書式ヲ以テ表彰状ヲ授与」することについても同様に差し支えない旨が示されている。既に 1 頁脚注 3 で指摘した如く、表彰状が横須賀海軍建築部長名で出されたことを鑑みるに、被表彰者二名の扱いは建築部管轄下で当時工事作業に従事していた「軍属」であったと考えられる。こうした事情を踏まえると、表彰の取扱いが制度上のみならず、実際に「軍属」にまで既に及んでいた様子がうかがえる。

また、横須賀鎮守府内の善行表彰に関する事項について、昭和 12 年（1937 年）7 月 1 日改版の第 14 版『横須賀鎮守府例規[33]』で確認すると、大正 13 年（1924 年）9 月 30 日付で〔横須賀海軍〕人事部長から「陸上各庁各学校長」へと照会された「善行表彰ニ関スル件」が例規中、第十七類 第三款に掲載されており、「衆人ノ模範ト為スヘキ行為アリタル者ニ対シ表彰セラレタル際」に、「艦船職員服務規程」第五十二条に準じて横須賀鎮守府司令長官への報告を求めていた。以上の先例が存在する状況下で、表彰状は作成されている。特にその取扱運用を巡っては、大正 8 年（1919 年）6 月 23 日の達第百十一号によって通達され、以後改正を繰り返す「艦船職員服務規程[34]」が参照されていた様子がうかがえる。

改めて今回見出された表彰状に目を向けると、表彰状には「平素能ク上司ノ指示ヲ恪遵躬行セル賜」と記され、平素の勤務態度、具体的には上司の指示を順守する姿勢と結び付けて説明がなされている。さらに「其ノ犠牲的行為ハ真ニ海軍軍属精神ノ発露トシテ衆人ノ模範トスルニ足ルモノト認ム」として、当該行為を海軍軍属精神の発露であり、衆人の模範に足るものと評価している。以上を踏まえ、表彰状にいう「善行」とは、突発的な空襲下における「犠牲的行為」と、戦時体制下における平素の命令遵守という勤務態度を結びつけて位置付け、海軍軍属精神の発露として「模範」に値すると叙述する枠組みによって構成されたものと解される。

10. おわりに

本稿では、80 年余の歳月を経て、額装された状態で伝来した表彰状から、ドゥーリットル空襲における、横須賀海軍工廠への被害実態についての理解を深めてきた。それは、表彰状が記すように「白昼突発的」な空襲であり、建物の火災が発生すると、困難を伴いながらも懸命に消火活動にあたった人々の存在が確かに読み取れた。しかしながら、死傷者数を含め、翌日の鎮守府発表が載せられた新聞紙上からはその実態を正確に知ることはできなかった。また、表彰状が額装されたまま今回発見されたことの意義は、かつてどこに掲示されていたのかという点と何らかの関係があると考えられる。今後これらを明らかにするためには、テクストのみならず、額装に用いられた素材についても、検討対象に含める必要があるだろう。今後の調査研究を進める上での一助となれば幸甚である。

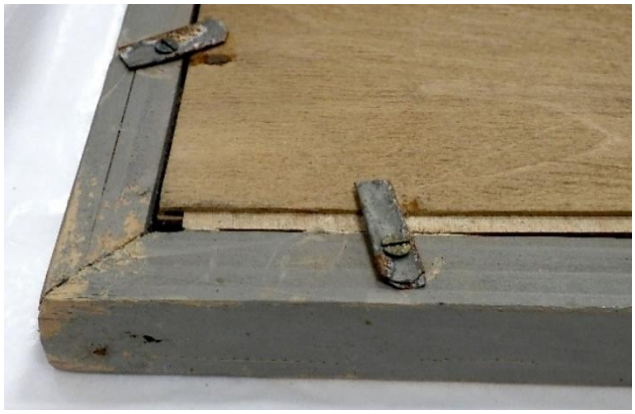


写真 4　額装裏面の様子（写真は左下角）
トンボは金属製のパイプを平らにつぶした後
マイナスねじで取り付けられる

---

[32] 海軍大臣官房『海軍諸例則』巻二(3)（原書房、1986 年）356 頁 ※原本 1941 年刊

[33] 簿冊「昭和 17 年 10 月 1 日 横須賀鎮守府例規 巻 2」（防衛省防衛研究所蔵）に所収される。尚、本稿では国立公文書館アジア歴史資料センター Ref.C12070559200 を通じて閲覧・参照した。当該資料は、14 版（昭和 12 年 7 月 1 日改版）であるが、追録の書き込みのほか、昭和 19 年中の通達を記した附紙等も一部確認できる。

[34] 同時に、明治 31 年（1898 年）制定の「軍艦職員勤務令」が廃止となる。海軍大臣官房『海軍制度沿革』巻三 (2)（原書房、1971 年）1278 頁 ※原本 1939 年刊

【史料】
・「昭和 12 年 達 完」（防衛省防衛研究所蔵）
本稿では国立公文書館アジア歴史資料センターを通じて参照した。レファレンスコードは以下の通り。（以下同断）
C12070101900、C12070102000、C12070102100
・「昭和 17 年 10 月 1 日 横須賀鎮守府例規 巻２」（防衛省防衛研究所蔵）
C12070557800 うち、「第 17 類 位勲褒賞／第 3 款 表彰」C12070559200
・「横須賀鎮守府戦時日誌」（防衛省防衛研究所蔵）
C08030316800
・「横須賀鎮守府公報」（防衛省防衛研究所蔵）
昭和 17 年 7 月 19 日以降の発行所収の「簿冊」は以下の通り。
C12070705100・C12070710700（部内限）
・横須賀海軍建築部「部報第一一号（部内限）」（昭和 18 年 5 月 6 日）（横須賀市立中央図書館郷土資料室蔵）
・『神奈川新聞』昭和 17 年 4 月 19 日

【参考文献】
・防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 本土防空作戦』（朝雲新聞社、1968 年）
・防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 本土方面海軍作戦』（朝雲新聞社、1969 年）
・海軍大臣官房『海軍制度沿革』巻三（原書房、1971 年）※原本 1939 年刊
・防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 北東方面海軍作戦』（朝雲新聞社、1975 年）
・福井静夫『海軍艦艇史 3 ―航空母艦、水上機母艦、水雷・潜水母艦』（KK ベストセラーズ、1982 年）
・海軍大臣官房『海軍諸例則』（原書房、1986 年）※原本 1941 年刊
・石井昭『ふるさと横須賀』下（神奈川新聞社、1987 年）
・『横須賀海軍工廠外史〈改訂版〉』（横須賀海軍工廠会、1991 年）
・福井静夫『日本海軍全艦艇史』（KK ベストセラーズ、1994 年）
・海軍歴史保存会『日本海軍史』第七巻（第一法規出版、1996 年）
・柴田武彦・原勝洋『日米全調査 ドーリットル空襲秘録』（アリアドネ企画、2003 年）
・呉市海事歴史科学館『呉市海事歴史科学館図録 福井静夫コレクション傑作選 日本海軍艦艇写真集 潜水艦・潜水母艦』（ダイヤモンド社、2005 年）
・安池尋幸監修、半島史研究会編『新稿三浦半島通史』（文芸社、2005 年）
・『横須賀市文化財調査報告書第 43 集 旧横須賀海軍工廠造機部製罐工場ほか建物及び同クレーン調査報告書 ―米海軍横須賀基地 A33・A36・A39 建物―』（横須賀市教育委員会、2006 年）
・『横須賀案内記』（横須賀開国史研究会、2007 年）
・岡野弘男「「実録」横須賀の空襲―「B25 爆撃機」の行動を明らかにする―」『開国史研究』第 8 号（横須賀開国史研究会、2008 年）
・高村聰史「横須賀市民の戦前戦後―「合衆国戦略爆撃調査団報告書 USSBS」の尋問記録から―」『市史研究横須賀』第 9 号（2010 年）
・『新横須賀市史』別編 軍事（横須賀市、2012 年）
・『新横須賀市史』通史編 近現代（横須賀市、2014 年）
・鈴木芳行『首都防空網と〈空都〉多摩』（吉川弘文館、2012 年）
・高村聰史「米英海軍による空襲と横須賀」『市史研究横須賀』第 13 号（2014 年）
・「《市民が語る横須賀ストーリー》教員生活と山中町空襲―鈴木千代子さんに聞く―」『市史研究横須賀』第 15 号（2016 年）
・「《市民が語る横須賀ストーリー》海軍工廠と職工生活―鈴木正年さんに聞く―」前同
・上山和雄編『軍港都市史研究Ⅳ 横須賀編』（清文堂出版、2017 年）
・田中宏巳『横須賀鎮守府』（有隣堂、2017 年）
・土田宏成『帝都防衛 戦争・災害・テロ』（吉川弘文館、2017 年）
・高村聰史『〈軍港都市〉横須賀：軍隊と共生する街』（吉川弘文館、2021 年）
・長谷川優也『戦史を編んだ人々』（帝京大学出版会、2026 年）

【附録：各種計測値】

額縁	縦 422mm　横 559mm～562mm　高 19mm
	深み 6mm　かかり 17mm
	(額外寸法 縦 422mm 横 559mm～562mm)
	※備考　左上角裏面に釘の露出あり
吊り金具	針金　直径 2mm
トンボ	留具　長 20mm～30mm　巾 5mm
	マイナスねじ　直径 4mm
面材	ガラス　縦 385.5mm～386mm　横 528mm　厚 3mm
裏板	ベニヤ板(薄板三枚重)
	(裏板寸法 縦 383mm 横 525mm～527mm 厚 4mm)
本紙	表彰状　縦 389mm　横 523mm
	横須賀海軍建築部長印　縦 25mm　横 25mm

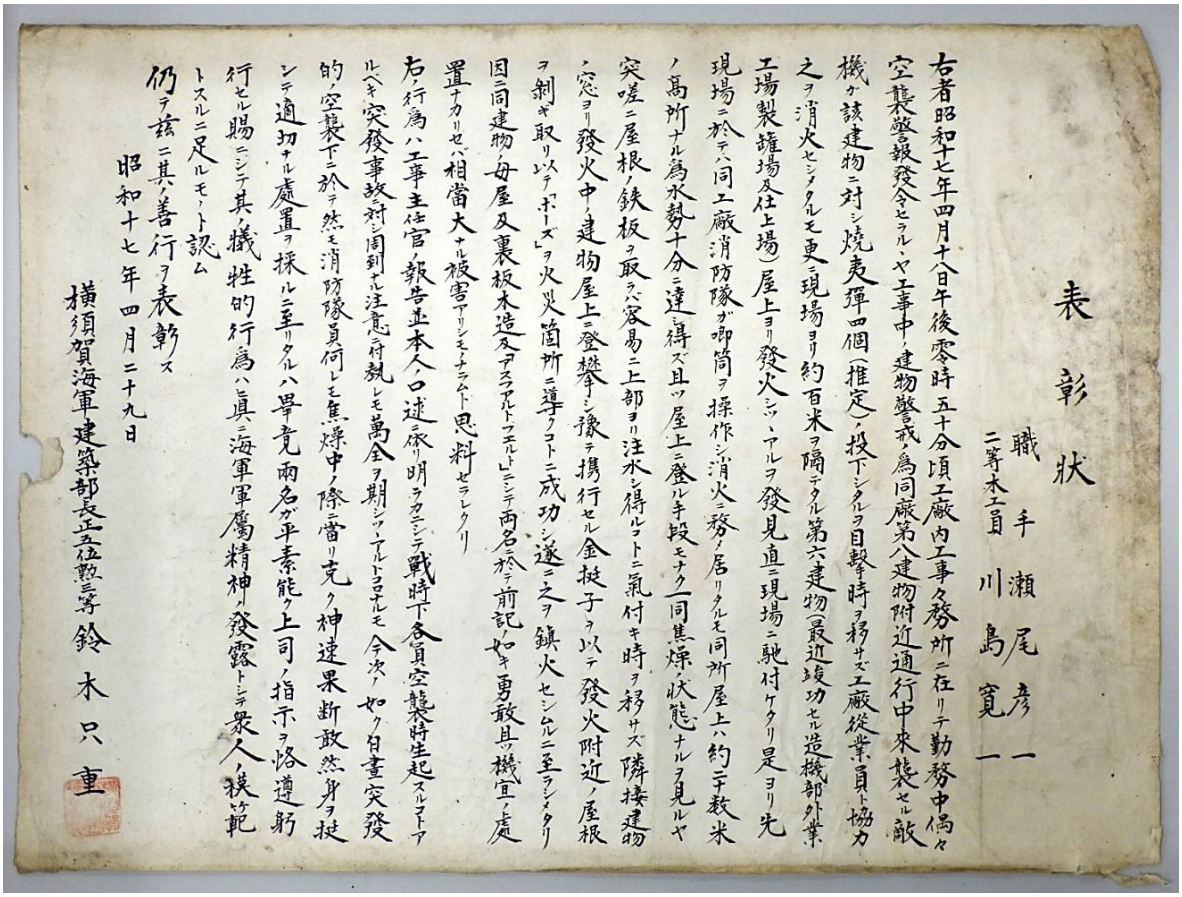


写真５　表彰状（額から外した状態）

《 資料紹介 》

軍艦大鯨進水記念絵葉書

―横須賀市立中央図書館所蔵資料から―

郷土資料室　橋本和磨

1. はじめに

表題の通り、横須賀市立中央図書館では、各種の記念絵はがきも所蔵している。記念絵はがきは、出来事を祝うために制作された印刷物であると同時に、当時のデザインや広報のあり方、さらには配布・受領・保存等の「使われ方」を映し出す資料でもある。本稿では、ドゥーリットル空襲の際、第四船渠で航空母艦への改装中に「十三番機」の爆撃を受けた大鯨の進水記念絵葉書について取り上げる。

図１　軍艦大鯨進水記念絵葉書
（横須賀市立中央図書館所蔵）
本号１頁掲載の別図案の一枚　背景は艦名の如く
絵葉書の枠をはみだす「おおくじら」であろう

2. 潜水母艦大鯨から航空母艦龍鳳へ

ここでは、海軍歴史保存会『日本海軍史』第七巻（第一法規出版、1996 年）を主な参考として、潜水母艦大鯨から航空母艦龍鳳へと至る、起工から解体までの過程を簡単に取り上げる。昭和５年（1930 年）調印のロンドン海軍軍縮条約により、主力艦に続き、補助艦艇の保有を大きく制限された日本海軍は、制限を受けない一万トン以下の潜水母艦・給油船などを、戦時に航空母艦への改装を前提として設計することで、空母不足を補うことを計画した。以上を背景として、のちに大鯨と名付けられた潜水母艦は、昭和８年（1933 年）４月に横須賀で起工し、同年 11 月 16 日の進水式を迎えた。尚、竣工は翌年３月 31 日とされる。その後、昭和 16 年（1941 年）９月に航空母艦への改装工事に着手し、その最中ドゥーリットル空襲によって被害を受けている。改装工事は昭和 17 年（1942 年）11 月中に完成し、工事に伴い龍鳳と改名、航空母艦へ類別変更される。最後は、呉で爆撃を受け、飛行甲板・格納庫等を損傷し、終戦を迎える。その後、昭和 21 年４月から９月にかけて解体となった。

3. 進水式と記念品

進水式をめぐっては、絵葉書にとどまらず多様な記念品が存在し、たとえ同じ媒体であっても、異なる経緯をたどって各地に伝来している。とりわけ、軍港と市民の関係を明らかにするうえでは、進水式を一つの催事として捉え、配布物・記念品の性格を検討することも重要な課題である。近年、横須賀海軍工廠における進水式を対象とした専論としては、齋藤義朗氏の研究が重要であり、進水記念絵葉書については硴崎貞雄氏がその全体像を提示している。（末尾の参考文献を参照）今後、進水記念絵葉書のコレクション管理に際しては、こうした既往研究に学びつつ、関連する諸資料を含めて体系化し、横断的に検討できる統合視点も求められよう。

他方、進水記念絵葉書をまとまったかたちで復刻したものとして、戸高一成編『復刻版 日本海軍進水絵はがき』（光人社、2004 年）が従来からよく知られる。同書第３巻では、本稿で取り上げる「軍艦大鯨進水記念絵葉書」も収録されており、基礎的

な比較参照枠を与えている。加えて近年は、デジタルアーカイブの整備が進んだことで、絵葉書をデジタル化して公開する事例が増えている。これにより、離れた場所に所蔵される資料であっても、画像データを通じて比較検討することが以前より容易になりつつある。とりわけ、所蔵機関ごとの掲載画像を相互に参照することで、進水式当日のスタンプ等の押印の有無といった点については、一定程度の確認が可能である。他方で、消印の判読や具体的な使われ方などは、十分に検討しがたい場合も少なくない。したがって、こうした細部については、今後、現物にあたり確認を重ねていく必要がある。実際に現物を精査すると、消印から書面内容に踏み込まずとも絵葉書の使用時期が判明することもあり、絵葉書が記念品として保管されたのか、あるいは通信手段として用いられたのかといった利用実態を考えるうえで、具体的な手がかりとなり得る。

4. 本稿の目的

先に述べた通り、デジタル化して公開する事例が増えつつある絵葉書が、それぞれが異なる経緯をたどって各地に伝来していることを踏まえ、本稿では、大鯨の進水記念絵葉書を題材として、絵葉書の図案以外の要素に目を向け、資料の「使われ方」を考える手がかりを紹介する。本稿では第一に特殊通信日付印を取り上げ、第二に絵葉書カバー（タトウ）に注目する。以上二点を検討することで、今後の比較検討に向けた足がかりとしたい。

5. 特殊通信日付印について

進水記念絵葉書には進水式当日、横須賀海軍工廠で押すことのできた記念スタンプが押されている場合が多い。一方でこれとは別に郵便局が用いた通信日付印（消印）にも注意を払う必要がある。昭和８年（1933 年）11 月 13 日付『官報』第 2061 号所収「逓信省告示第 2555 号」には、進水式当日にあたる 11 月 16 日、横須賀郵便局で使用される予定の特印（特殊通信日付印）の図案（図２を参照）が掲載されている。使用方法については、「料金を完納した書状（ただし無封の書状を除く）および郵便絵葉書の引受に用いられるが、書状については、希望者が郵便局窓口に差し出したものに限って使用される」とみえる。また、「使用当日ならびにその後三日間は、料金完納の郵便葉書に加え、記念の目的で一銭五厘以上の郵便切手を貼付した物件についても、消印の希望に応じる旨」が示されている。さらに、昭和８年度の『逓信省年報』によれば、その意匠については、「進水しようとしている軍艦大鯨の艦首に、斧と月桂樹をあしらい、進水式を記念する趣旨を表した」と説明される。

図２　特殊通信日付印
「軍艦大鯨進水記念 横須賀 8・11・16」
『逓信省年報』（逓信大臣官房文書課、1935 年）国立国会図書館デジタルコレクションより転載

図３　記念スタンプ
「横須賀海軍工廠昭和八年十一月十六日軍艦大鯨進水記念」
図１から図案比較用として部分再掲

6. 絵葉書カバー（タトウ）について

タトウとは、「畳紙（たとうがみ）」に由来するとされ、今回の事例では、絵葉書を保護する包み紙を指す。図４を見ると、絵葉書と同様、進水式を象徴する斧や水飛沫を想起させる意匠が施されていることが分かる。加えて、裏面には主要要目の数値（表１参照）が記されており、タトウ自体が解説の機能も併せ持っている。さらに注目されるのが、「此包紙を折り返せば封緘郵便となります」という記載で、折り返して封をすれば、そのまま郵送に供し得ることを明示している。以上を踏まえると、(1) 進水式の象徴を伝える意匠、(2) 主要要目の解説、(3) 封緘郵便としての機能という複数の役割が一体化したものといえる。同時代他艦の進水記念絵葉書カバーとの比較検討が必要なことは言うまでもないが、今回の事例から、あえてカバーの特徴を指摘すると、記念品としての「見せる」側面と、郵送・配布に適した「使う」側面が同居している点に見出すことができよう。

図４　軍艦大鯨進水記念絵葉書カバー（タトウ）

図３と同図案のスタンプがあるが
朱肉の色は図１とは異なる

艦種	潜水母艦
全長	197米30
幅	18米04
吃水	5米20
基準排水量	1万屯
速力	20節
兵装	12.7糎　4門
	機銃　12門
馬力	13,000馬力
乗員数	413人

表１　軍艦大鯨主要要目

図４裏面より作成
基準排水量は一万屯と見える

7.　おわりに

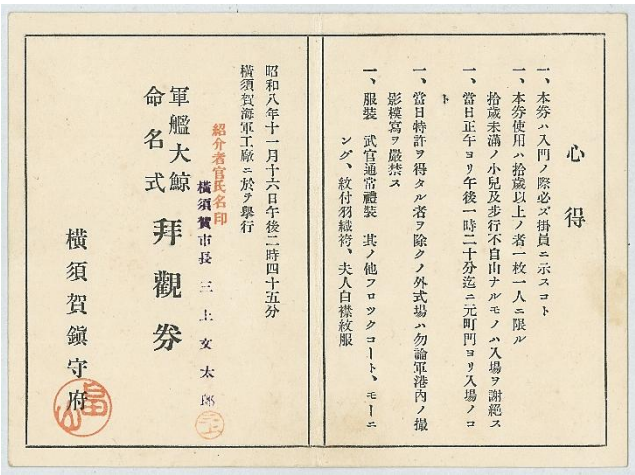
ここまで、特殊通信日付印と絵葉書カバー（タトウ）に注目してきた。本稿の結びとして各地に於いて整備が進むデジタルアーカイブにも触れておきたい。既に言われるように、デジタルアーカイブは調査の入口としてきわめて有用である。所在確認や関連資料の探索、全体像の把握といった作業を、時間や距離の制約を越えて可能にする点で、その利便性は疑いない。加えて、必要な情報に迅速に到達できるという効率の面だけでなく、あえて最初から明確な目的を定めずに眺めていると、思いがけない発見や新たな問いを生む場合もある。いわば「調べる」ためだけでなく、「出会う」ための場としても機能し得るところに、デジタルアーカイブの魅力がある。

こうした利用を支える基盤として、検索精度を高めるためのメタデータ整備が欠かせないことは言うまでもない。具体例を挙げれば、件名や地名、人名、年代、媒体種別といった基本情報の付与にとどまらず、表記ゆれへの配慮、典拠の統一、関連資料へのリンク付け、加えて、画像品質や閲覧環境も時代に即した対応が求められる。まさに「地道なれども着実な積み重ね」が肝要である。事実、これらの積み重ねが利用体験を確実に左右する。こうした環境整備作業は今日も世界各地で続けられており、デジタルアーカイブが単発的に「作って終わり」となるのものではなく、継続的に育てていく取り組みであることを改めて示している。

一方で、スマートフォンで「いつでも、どこからでも、なんどでも」資料を眺められる時代であっても、どこかで本物を確かめたいという欲求はなくならない。画面上で拡大表示できても、紙質や印刷の手触り、色の沈み方、折れや擦れ、押印の凹凸、書き込みの筆圧といった情報は、現物に接してはじめて実感として把握できる場合がある。さらに、資料が保存されてきた来歴や周辺資料との関係なども、現地での閲覧が理解を深める契機となる。

その意味で、デジタルをきっかけに関心が深まり、書物や資料を携えて街を歩き、図書館に加えて博物館・文書館へと足を運ぶ人は確実にいる。だからこそ、デジタルアーカイブの在り方は、利用者との関係のなかで問い直され続けるべきである。絶えず繰り返される試行錯誤の中から学ぶことは多い。歩みを止めることなく、小さな改善を積み重ねることが、資料を未来へ手渡すための確かな実践であり、地域の知の基盤を強くする営みそのものでもある。

【参考文献】
・海軍歴史保存会『日本海軍史』第七巻（第一法規出版、1996 年）
・戸高一成編『復刻版 日本海軍進水絵はがき』（光人社、2004 年）
・『新横須賀市史』別編 軍事（横須賀市、2012 年）
・砲崎貞雄「わが国の進水記念絵葉書：その誕生と特徴」『海事博物館研究年報』第 41 号（神戸大学海事科学部海事博物館、2013 年）
※その後、砲崎貞雄「わが国の進水記念絵葉書」（2014 年）が日本船舶海洋工学会 デジタル造船資料館ウェブサイトにて公開されている。
https://zousen-shiryoukan.jasnaoe.or.jp/report/2818/3/（最終閲覧日：2026 年 5 月 20 日）
・砲崎貞雄「わが国の進水式 支鋼切断と進水斧」『日本船舶海洋工学会講演会論文集』第 22 号（2016 年）
・上山和雄編『軍港都市史研究Ⅳ 横須賀編』（清文堂出版、2017 年）
・齋藤義朗「進水式の日の横須賀―「進水気分で賑ふ軍港市」―」『海事史研究』第 75 号（2018 年）
・高村聰史『〈軍港都市〉横須賀：軍隊と共生する街』（吉川弘文館、2021 年）


心得
一、本券ハ入門ノ際必ズ掛員ニ示スコト
一、本券使用ハ拾歳以上ノ者一枚一人ニ限ル
拾歳未満ノ小兒及歩行不自由ナルモノハ入場ヲ謝絶ス
一、當日正午ヨリ午後一時二十分迄ニ元町門ヨリ入場ノコト
一、當日特許ヲ得タル者ヲ除クノ外式場ハ勿論軍港内ノ撮影模寫ヲ厳禁ス
一、服裝　武官通常禮裝　其ノ他フロックコート、モーニング、紋付羽織袴、夫人白襟紋服

軍艦大鯨命名式拝観券
紹介者官氏名印
横須賀市長　三上文太郎
昭和八年十一月十六日午後二時四十五分
横須賀海軍工廠ニ於テ擧行
横須賀鎮守府

図５　軍艦大鯨命名式拝観券（参考）
（横須賀市立中央図書館郷土資料室所蔵）

心得に「式場ハ勿論軍港内ノ撮影模写ヲ厳禁ス」とある
裏面に本券所持者の拝観席へ至る略図が記載される

郷土資料室事業概要（令和７年度）

1　郷土資料に関するレファレンス

(1) 問い合わせ・相談件数　122 件

(2) 郷土資料利用許可件数　　68 件

2　関連団体の研修会等参加実績

(1) ９月８～12 日・10 月６～10 日、独立行政法人国立公文書館　「令和７年度アーカイブズ研修Ⅲ」〔堀井〕

(2) １月 21 日、令和７年度市町村図書館等職員研修「ファミリーヒストリーの調べ方―公文書の活用法―」〔橋本〕

(3) ２月 13 日、神奈川県図書館協会　地域資料委員会研究会　「地域資料の整理保存にかかる現状と課題」〔橋本〕

3　依頼業務等

○　6月 12 日、池上コミュニティセンター講座「衣笠の歴史　中世矢部郷」　講師〔谷合〕

○　12 月 10 日、16 ミリ試写室“映像とお話”「郷土資料室の所蔵資料と公開活用」　講師〔谷合〕

○　12 月 18 日、久里浜ダイアモンドマンション住民の会講座　「中央図書館に眠る横須賀の貴重資料たち」講師〔谷合〕

○　２月４日、田浦コミュニティセンター講座（会場：追追コミュニセンター）「図書館の貴重資料から学ぶ“知る”を楽しむ横須賀ヒストリー」　講師〔谷合〕

○　２月 13 日、神奈川県図書館協会地域資料委員会研究会「地域資料の整理保存にかかる現状と課題」事例発表〔谷合〕

○　３月７日、三浦半島の文化を考える会講座「中世の矢部郷について」講師〔谷合〕

4　所蔵資料等の公開・活用・アーカイブ等

(1) 郷土資料の展示（日付は開催会期）

A）トピックス展示　『緒明山通信第 15 号・第 16 号関連展示』（常設展の一部を利用）
　中央図書館１階ロビー：５月１日～６月 24 日

B）中央図書館、自然･人文博物館、教育研究所の３館連携特別企画　「昭和 100 年めぐり」

【企画 1】『「広報よこすか」でたどる昭和』
　中央図書館１階ロビー：６月 27 日～８月 27 日

【企画 2】『20 世紀前半の横須賀と出版』
　中央図書館１階ロビー＋３階 EV 前フロア：
　10 月 24 日～12 月 24 日

以上、中央図書館開催企画展示

C）ミニ展示『横須賀海軍工廠　昭和の進水記念資料』　中央図書館３階 EV 前フロア：
　６月 27 日～８月 27 日

D）常設展示「郷土資料展示コーナー」
　中央図書館１階ロビー：通年（ただし、企画展示及び他の機関主催の展示期間中は休止）

『「広報よこすか」でたどる昭和』展の様子

『20 世紀前半の横須賀と出版』展：１階の様子

『20 世紀前半の横須賀と出版』展：３階の様子

(2) 資料複製（デジタル化）件数　17 件 17 点

(3) デジタルアーカイブ（図書館ホームページでの資料公開）
　※ 点数は累計 / ☆＝令和７年度の変更・更新分を含む。
　※ 上記(2)のうち可能なものは逐次公開している。

A）絵葉書：市内各所　143 点☆

B）絵葉書：横須賀海軍工廠建造の軍艦　14 件、74 点☆

C）貴重図書　３件、４点

D）写真：ガントリークレーン、EM クラブ他　215 点☆

E）写真：旧軍関係　２件、54 点

F）古文書・古記録　３件、10 点

G）地図・絵図　　９件、10 点☆

H）版画・浮世絵　　17 件、20 点☆

I）郷土資料室『緒明山通信』　18 点☆

計　548 点

(4) 情報配信

A）X（旧ツイッター）　12 回
　最多表示回数 7,237 「戦前期の新聞の情報提供依頼」

B）YouTube 横須賀市公式チャンネル　０本
　累計３本　最多視聴回数 6,142 「駅と鉄道の風景 京急線編」
　※ 回数は共に 2026.5.1 現在

(5) 郷土資料室情報誌（Web 上での無料頒布）

A) 緒明山通信 第 16 号　令和７年４月 18 日発行

B) 緒明山通信 第 17 号　令和８年３月６日発行

C) 緒明山通信 第 18 号　令和８年３月 20 日発行

5　寄贈資料　（寄贈順、敬称略）

(1) 横須賀戒厳司令部情報部震災関係情報其ノ四十六、同四十七附録　2件各3部　計6部
慶応義塾大学三田メディアセンター

(2) 引揚者乗車票　1点　藤沢市・矢吹ゆきみ

(3) 米国陸軍作成地図「極楽寺」1945年　1点
米国・キセキ遺留品返還プロジェクト
代表 ジャガード千津子

(4) 鈴木万蔵氏旧蔵海軍関係絵葉書等　24件95点
市内・鈴木　等

(5) 表彰状（額装）昭和17年4月29日付、横須賀海軍建築部長　市内・匿名

(6) 記念艦三笠由来のナイフとフォーク　6セット12本（うち5セット10本は三笠保存会に寄贈）
市内・匿名

(7) 相州三浦郡小網代村古地図、帝国軍人協会関係資料等　計6点　市内・出口正樹

(8) 昭和21年2月、米軍撮影航空写真　平作小学校付近　計4枚　市内・千葉妙子

(9) 支那事変従軍日記（テキストデータ）　1点
東京都・新井　正

(10) 横須賀港一覧絵図、米水師提督ペリー久里浜上陸図等　計 21 件　市内・丸山克彦

(11) 山中家文書（長府藩藩士関係史料、絵葉書等）114件466点　市内・山中さえ子

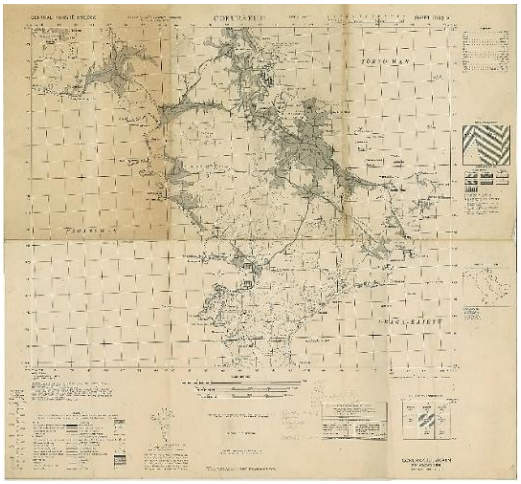
(12) 元海軍兵曹長田神正三氏旧蔵海軍関係資料等一式　市内・田神　明

(※) 庁内各部局・関連機関等からの移管・取得資料

A) VHSテープ「マリンポート・フェスティバル 田浦民俗芸能保存会 木遣・囃子」　田浦行政センター

B) 旧田浦小学校歴史資料　98 点　旧田浦小学校

久里浜駅発行の引揚者乗車票


米国陸軍作成地図「極楽寺」1945年

6　図書寄贈者・団体等一覧　（五十音順、敬称略）

厚木市文化財保護係、 安城市教育委員会文化財係、安城市歴史博物館安祥文化のさと地域運営共同体、市川市市史編さん事業担当、 小田原市立中央図書館地域資料コーナー、 神奈川県立公文書館、 神奈川県立図書館、 神奈川大学日本常民文化研究所、鎌倉市教育委員会文化財課、 鎌倉市中央図書館近代史資料担当、 川越市立博物館、 寒川公文書館、16ミリ試写室、 鈴木晶、 世田谷区立郷土資料館、世田谷区区史編さん担当、 袖ヶ浦市郷土博物館、千葉商科大学、津村恒夫家、長野市公文書館担当、仁藤将史、二戸市教育委員会、 常陸大宮市教育委員会市史編さん事務局、 福岡市博物館市史編さん室、藤沢市文書館、 府中市ふるさと文化財課、 三浦半島の文化を考える会、 安川千秋、 大和市市史・文化財係、 横須賀開国史研究会、 横須賀考古学会、横浜市史資料室、横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター、 渡辺匡

7　事務執行体制の変更

	（令和7年度）	（令和8年度）
中央図書館長	柿原美奈	加藤博昭
郷土資料室担当主査	谷合伸介	谷合伸介
会計年度任用職員	佐藤明生	佐藤明生
会計年度任用職員	堀井由貴子	堀井由貴子
会計年度任用職員	橋本和磨	橋本和磨

あとがき

『緒明山通信』第19号をお届けします。今号では、Doolittle空襲に関する新たな資料を基にした研究ノート、軍艦大鯨進水記念絵葉書の紹介及び昨年度の事務概要を掲載しました。

Doolittle 空襲は米軍による日本列島への最初の空襲ですが、その際に横須賀海軍工廠が受けた被害とその直後に行われた消火活動の実態を示す資料を分析するとともに海軍における善行表彰制度にも言及しています。

本誌は印刷発行せず、本市関連のホームページからダウンロードしていただくことにより無償で頒布しています。図書館HPの「デジタルアーカイブ」、あるいは横須賀市HPの「市史編さん《郷土資料室》＝旧市史のトップ」にアクセスしてください。

デジタルアーカイブ⇒
https://www.yokosuka-lib.jp/contents/archive/
スマートフォンの場合は1ページ右上の二次元コードをカメラ機能で読み込んで下さい。

市史編さん《郷土資料室》＝旧市史のトップ⇒
https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/8150/shish/shishi1-top.html

図書館HP「デジタルアーカイブ」のご案内

横須賀市立図書館ホームページでは「デジタルアーカイブ」のページを開設しています。近世以降の絵図、戦前期の絵葉書や写真等の郷土資料の他、『緒明山通信』（旧『市史資料室通信』）のバックナンバーもご覧いただけます。